

問題提起

経営哲学から「社会的責任」を考える

コーディネータ
早稲田大学 商学学院教授

厚 東 偉 介



ただいまご紹介いただきました厚東でございます。本日は、お忙しいところ、ありがとうございます。そして、講師を引き受けられた岡本先生、八巻先生、中村先生、本当にありがとうございました。

これから「企業の『社会的責任』を考える」というテーマでお話をしたいと思います。問題提起でございますので、簡単にいききたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

(シート1) まず最初に、1 はじめに。現代では、企業だけでなく、組織や政府、個人まで社会的責任が問われる時代になっています。2010 年 10 月に社会的責任、SR という名称で ISO26000 が承認されています。要するに、ここでは CSR、コーポレート、企業だとか団体ではなくて、基本的に SR、社会的責任という名前で 26000 という標準が承認されております。このことは、企業だけではなくて、われわれ大学も含めて、病院、そのほか NPO といわれる組織も含む、非営利組織も含めて、さらに、個人までも含みます。われわれも含まれます。消費者も含めて、すべて全体として、現代社会で生きているかぎり、社会的責任があるということで考えています。ここでは企業に光を当て、そこから派生して、さまざまな諸領域にまで広げて社会的責任を検討する。

タイトルのところで、「企業の」が外へ出ていて「社会的責任」とかぎ括弧で書いて「考える」と書いてありますが、なぜ「社会的責任」だけかぎ括弧になっているのかというと、企業だけではなくて、企業を中心として一般的に考える必要があるだろうということで、このような形のタイトルになりました。

(シート2) 経営学には、「社会的責任」という領域があるのです。このフォーラムで、原理まで考えるには、基本的に哲学まで考えないといけないと思いました。経営哲学というのは、哲学と経営学の双方の領域に関係する。経営哲学というのですから哲学が原則です。経営学の中で深く哲学とかかわりあるところが経営哲学なのです。「経営哲学学会」というのがありますが、そこでは理念だとか倫理だけ議論していれば経営哲学だと思う人がいますけれども、それはまったく不正確です。やはりここに書いてある哲学の領域まで踏み込む無謀な冒険が必要です！ 何で無謀か？ その理由は、考えてみると大変なことなのです。アリストテレスの時代から哲学をやっています。われわれの経営学は 20 世紀の学問です。アリストテレスは紀元前 300 年前の人物です！！ 学問の歴史が 2000 年以上も足りないわけです。

大体、経営哲学の人は及び腰で、哲学まで本格的に遡らないで、哲学らしいところを探ってお

しまいというのですけれども、それではだめだと思います。現代社会の諸問題は諸領域にまたがる重層的な特徴をもつ。現代科学というのは分析中心です。これは、物事を厳密に区切り、その中だけで精密な分析と結論を出すことこそが科学的態度であり、研究分野での研究業績になると評価されている。そして、総合的、全体的研究は必要だとはいうのですけれども、いずれ、今後やる必要があるだけで、両方のところで誰もが冒険しないようです。私は年もとっているし、私自身のこういう性格もあるので、やはり無謀な冒険に挑戦しないかぎり、学問も社会も発展してこなかったはずだ。やはり無謀な冒険をしなければだめだろうということで、これから無謀な冒険をすることにして、ちょっと、いや、だいが無理して勉強しました。(笑)

(シート3) 次に、私はもともと経営学徒ですから、哲学には不案内なのですが、われわれの商学部には哲学の大先生がいらっしゃる、八巻和彦先生、矢内義顯先生と立派な先生がいらっしゃいます。ほかにもいっぱいいらっしゃるのですけれども、とりあえずわれわれ商学部にいる、その立派な先生に私が弟子入りをしまして、先生のところへ押しかけて、夏休みに大変なご迷惑をお掛けするのですが、とりあえず弟子入りをしました。

まずはじめに、哲学とは一体どのような学問領域があるかという、これは大先生を前にして話すのは恥ずかしいのですけれども、基本的に大別すると「価値論」と「知識論」がある。「価値論」というのは何かというと、美学と宗教学・神学、それから倫理学です。他方、「知識論」というのは、認識論、方法論、論理学です。われわれは学問をやっていると、主に認識論と方法論と存在の研究については論及するのですけれども、一方では価値論といって、倫理学だとか宗教学や神学までは入っていかない。それは「科学」ではないからというのです。

そうすると、哲学とは何だろうか考えると、倫理学だけでもない、さらに知識論だけでもない。そこでよく考えてみると、シート3の図1に大きな字で「存在論」と書きましたが、やはり本当の意味で「存在論」があるところが「哲学は哲学」である。そこで、「経営哲学」とは何だということ、やはり経営学だけではなくて、企業なり、組織なり、人間の生きざまが全体として、実態として存在する。その実態をどういう形で研究するのかというのが哲学です。倫理は、それに対して良かった、悪かったと旗を上げるだけですから、これだけではやはり不十分で、基本的に哲学では「存在」まで戻る。存在まで戻ると一体どういうことになるのでしょうか。最初のところで重層的だとか、多重的だとかという問題が出てきますけれども、この点に行きつきます。(シート4)

なぜ哲学まで遡ったのかということ、現代の企業は多重的システム、重層的システムというように、その用語はさておき、要するに輻輳しているのです。もう少し具体的に述べると、企業は普通、経済学の人たちが考えるところは経済システムで考える。そのため、技術の問題を含めて、経済的側面の議論をすることが多い。この側面は重要ではあっても、経済的側面だけでは不十分です。技術やエコシステム、生態学の領域とも関係する。それだけで終わるかということ、そんなことはない。政治や法律の問題もある。本日、岡本先生にお願いしましたように社会や文化や社会心理という領域もあるのです。

考えてみると、多重的な問題を考えるには社会心理学だけでもない、経営学だけでもない、経済学だけでも法学だけでもない。では、どうやって考えたらいいか。今までのところこういうことをほとんどやっていない。経済学部だとか政治学部だとか商学部だとか、分化された学部がいろいろあるのですけれども、そのような学問というのは18世紀から19世紀の近代科学の中で機能分化していくということが大切で、機能分化され限定された領域で研究することが研究を発達させることだというのが20世紀までですが、21世紀になったらそうではない。そのためそれぞれの諸領域の中で、分析だけではなくて、総合的に考えるような枠組みを考える。考えてみると、今のところ、そのための方法論はないのです。

ないときにどうするのでしょうか。「なければしょうがない」ではない。また、そんなことは怖くてできない。そのための方法を考えるために、きちんと先生のところへ出かけて行って、哲学の先生のところで指導を受けると、存在論までである。そこで、存在論までやれば、基本的にどこかで通底するはずだ。通底するところまでおりていけば、間違いなくどこかでほかの領域と出会うはずだということで、やはり経営哲学をきちんと腹を据えてやらなければいけないということになりました。倫理や理念ではとても不十分だということになります。それで、このようなことを考えたということになります。

(シート5) アリストテレスという古代のギリシア哲学者(B.C.384-322)がいるのですが、ここには文学部の哲学科の方がいらっしゃいますから、その方は十分ご存じなのですが、もともとアリストテレスが述べるには、人間の実践というのは「善」を目指すのである。「善」というのは何かというと、徳、幸福、行為実践、正義も含めて、これらのものがすべてなのだと述べています。この「善」というものは、20世紀近くになると、「善」というのは実証できないものだから、全部無視してしまって、実証可能なところだけ扱って議論する。これではやはり不十分でしょう。現在、倫理や責任を考える場合には、やはりアリストテレスの善まで戻らなければいけないということになります。

アリストテレスに従うと、善とはこのような形(シート5・図3)に示すことができるでしょう。下のほうに書いてある行為実践。これは、経営が行為実践です。行為も実践しなかったら経営にもならないでしょう。行為というのは、アリストテレスに言わせれば、善を目指すものであると言えます。

(シート6) 今度は実践における善の中で一つ、アリストテレスに言わせると、正義、正しさがある。英語ではジャスティス(justice)と呼ばれます。正義は二通りあるのです。合法性、法律にのっとってやるものと、公正、フェアネス(fairness)です。法律は、今回、法学の先生にお願いしておりますけれども、自然法があります。自然法から、そのうち実定法に分かれてきて、制定法、判例法、慣習法とそれぞれ法律の体系ができあがった。今回、中村先生にお願いしてあるのは、中村先生はもともと商法、会社法の大先生ですけれども、大変幅広く、そして深く法学を勉強されているから、こういうことまで含めて皆考えてくださいと言って大変なお願いをいた

しました。それから、八巻先生は哲学者ですから、哲学から考えてもらいたいとお願いをいたしました。

正義のほうをみると、もう一つは公正です。公正（フェアネス）は配分的正義、それから是正的　ここでは是正的と書いています。以前は匡正的という用語なのですが、現在では日本語としてこの漢字が使えないので、是正的といいますけれども、古い言葉では匡正的（きょうせい）というの、力で押さえる強制ではなくて、正すということです。それから、交換的正義。これは市場の中で交換的正義。配分的正義は、所得やその他含めて配分するものです。是正的正義というのは、社会的バランスを含めて、合法性と公平性が両方が整っていないかぎり、実践が実践としての善をもたないのだということをアリストテレスははっきりと述べていました。

さらに、次のような疑問がでることでしょう。今、21世紀です。アリストテレスは一体いつの人物か？紀元の前の人だろうと。500年ぐらいならまだ我慢するけれども、2000年以上も前の人の議論をもち出していったい何の意味があるのかということを考えてみると、ではやはり無意味かということ、そんなことはないということがここに出ています。

（シート7）ここで、すこし前に戻りますが、アリストテレスの哲学の意義はどこにあるのかというと、自然学があって、存在論の領域があって、アリストテレスの哲学の諸部門の中には、理論、真理認識の部分、テオリアの部門があります。そしてまた形而上学、メタフィジカの部門があります。これは一般的に哲学といわれる部門です。それから、自然学、ピュシカという部門、第二哲学の部門があります。もともとアリストテレスは自然学も熱心です。「アリストテレスのちょうちん」として、アリストテレスは、ウニ類の咀嚼口を『動物誌』に指摘しています。ウニの咀嚼口までもアリストテレスは研究した。それから、あと第三哲学で数学という領域があると述べています。これは一般的に理論の領域だと真理認識の領域です。もう一つは、アリストテレスの学説で大切なのは、実践、プラクシスの領域がある。これは実践目的。アリストテレスは、そういうところまで考えている。それから、制作、ポイエシスです。技術の領域がある。このような諸領域が全体としてアリストテレスの議論や学説の中に入っているのだから考えてみました。

（シート8）アリストテレスに従うと、理論的領域、実践的領域、制作的領域、このすべての領域に関係しています。だから、やはり経営哲学を考える場合には、今は理論も考える必要があるだろう。それから、実践もそうだし、制作、技術の問題も当然と考えてみると、アリストテレスがやはり一番総合的に考えられるはずだということで、アリストテレスのところへ戻っていく。これは八巻和彦先生、矢内義顯先生から厚東が話を伺い、アリストテレスがいいでしょうという指導を受けた。厚東はその教えに従い勉強したのです。

それだけではない。アリストテレスというのは、『政治学』の初めの部分で、そんなものは関係ないだろうと現代の政治学では無視される家政術、オイコノミアがあります。これはギリシャ語で書いたのです。普通、今のヨーロッパでエコノミーといいますけれども、これも述べている。こうして考えてみると、アリストテレスを読むと、経済システムと技術システムが両方とも入り

込んでいる。経営哲学とは、基本的に両方の課題が達成されないかぎり、やはり企業の問題は企業の問題として考えられないということです。

(シート9) もう一つ、アリストテレスの実践の領域を考える。ポイエシスの領域を含めて、これを総合的に考えると「文明」という概念が導かれる。「文明」とは何かというと、文化が進んでいる、それから「開明」あるいは「文明開化」という言葉で示されるようですが、これだけではありません。地球環境の生態学的制約条件、地球資源エネルギー、それから、技術体系までを含めた人間や社会の生活体系全体のあり方が「文明」です。

このような全体的統合体を文明と呼ぶ。理論・テオリア、実践・プラクシス、これが全部オイコノミアであって、確かにこれは文明と呼ぶべきだと思います。いや、呼びたくない。そう言っではいけないと言われるかもしれません。現代は古代文明、中世文明あるいは、近代文明といっています。近代文明の中にアメリカがあったり、ヨーロッパがあったり、アフリカがあったりいろいろするのだけれども、全体として近代文明の中にわれわれは生きているはずでしょう。それでは、近代文明というのは急にできたかということ、これは八巻和彦先生や矢内義顯先生のご専門になりますけれども、中世の哲学から、話をすれば長くなるかもしれませんが、12、13世紀頃から16世紀、17世紀ぐらいになるまで、つまり300年から400年、あるいは800年ぐらいかかって近代社会が成り立ってきた。

クザーヌス(1401-1464)という偉い哲学者がいる。八巻先生のご専門ですけれども、それは明らかに1400年代にその時代に生き考えていたのです。まさに中世哲学者として生きていた人なのです。しかし、今振り返ると、近代の哲学や社会の構築を考えながら話している。この時代に、クザーヌス本人は何を考えていたかということ、中世の真ただ中で中世の神の栄光を話していた。このことを考えると、今ここでなぜ中世の話を持ち出すのかということ、現在、21世紀というのは、もうすでに20世紀が終わっています。このことは、近代文明がそろそろ終わりになって、曲がり角に来ているのではないかと思うからなのです。曲がり角というのは直角に曲がっているのではないです。歴史的な曲がり角というのは、200年、300年あるいは500年もかかって非常にゆっくり曲がっている。現代がまさに、その準備期に当たっているということを考えると、やはり全体として哲学まで戻らなければいけないというところで、哲学の先生とりわけ、中世から近代への曲がり角に立っていた哲学者のお話を賜ることになるのです。

(シート10) 文明の社会的、技術的な基礎的存在条件が「哲学」である。だから、思想だとか理念、価値観などは、恐らく大体哲学と一緒に扱われるのだけれども、やはり哲学ではない。なぜなのかということ、思想や理念というのは、どちらかということを超えて価値のほうへずっと、そして思想体系というのは、その体系のほうへずっと引っ張っていく。哲学には、その基礎的存在条件までを含むから哲学になるのです。だから、「哲学」は、やはり哲学としてそれ自体存在しているのだということになるのです。

現代の生産活動からもたらされる結果あるいは、活動や行動からの帰結に対して責任を考える

と、文明それ自体のあり方を無視することはできないということになります。この点は今でもそうですけれども、長くなるといけません、この会場には、会計の偉い先生がたくさんいらっしゃいますけれども、多くの場合に費用の概念というのは廃棄物がないようなときの、あるいは、きわめてその処理や問題の少ないような状態で考えられているようです。たとえば、今の原子炉の廃炉をすると40年、50年かかるから、かなりの高額な費用になります。また立地のコストも高額です。その計算体系は基本的に従来の立地で廃棄物が少なく、施設の廃棄にも40年も50年もかからなくて済むような基準の計算です。放射性物質の廃棄物の処理コストも実際には膨大です。これは、明らかに全体としてきわめて多額です。現代、21世紀というのは、立地から廃棄物の処理完了まできちんと考える。やはり文明を少し考え直して、会計制度も含めて考え直さなければいけないということがもともと経営哲学をもってきた理由です。

（シート11）実践というのは自発的行為であり、思慮です。思慮は善を目指す。善はよいこと。善、正しさとは何かというと、共同体のためにならなければいけない。正義は共同体にかかわる徳であって、公共善です。人間や組織生活では科学技術を用いて財サービスを生産する。そのためには生命の尊厳を損なってはならない。これは非常に難しいです。しかし、大切なのは生命の尊厳です。

このことは、人間だけではなくて、すべての生命までが含まれます。生物の多様性とありますが、虫など死んでもどうということはないのではないかと思います。「みんな殺したって、便利で良ければいい！」と考えてみると、現在では、ミツバチがたくさん死んでしまっているのです。ミツバチなど死んだって問題ないではないかと思えます。しかし良くないのです。たとえば、イチゴも含めて、農作物を含めて、果実はミツバチがほとんど受粉させています。だから、ミツバチがいなくなると、果実や農作物が実ってこなくなる。ですから、全体としてやはり生命の尊厳を損なってはならない。もとへ戻ります。経営活動は実践です。実践は何のためにやるのか、善のためだろう。善とは何だというと、生命がどこかで侵されてはならないというようなことが制約条件になっているのです。

もう一つ、実践活動が善を目指すということは、正義を充足しなければならないのです。合法性と公正の両方が満たされなければならないのです。

（シート12）経営哲学の正義というのは社会性の原理です。現代の経営哲学の社会性の原理は、社会的公正の維持、アリストテレスに従って大別すると、合法性と公正がそれです。公正は、配分的正義、是正的（匡正的）正義、交換的正義の三つに分けられます。

すべての組織や個人の活動、われわれも含め、大学も含めてそうですけれども、われわれのすべての活動は社会性の原理に抵触してはならない。ですから、たとえば、自分のところは投資ファンドだから、別に生産などやっていないのだから、原発などとは関係ないと言うけれども、よく考えてみると、あるところだけにお金がたくさん儲かって、あとは皆貧乏であっても、「知ったことではない」ということも考えられるかもしれませんね。このような状態で何が問題かという

と、配分的正義、それから交換的正義を社会的に損っていきます。だから、全体として、やはりどこかでバランスをとらなければいけないということになります。最近では、そのため投資ファンドに対する規制が出てきています。なぜ規制が出てきたのかというと、法律はなくても、どこかでやはり社会的公正、バランスが崩れると、それを戻すための揺れもどしが必ず出てくるということになります。だから、これは社会性の原理という名前をつけておきました。社会性の原理という名称だと説得力を持ちますからね。

（シート 13）もう一つ、経営哲学における生産の原理。生産の原理は、生命の尊厳を最低条件にして、省資源（reduce）再使用（reuse）リサイクル（recycle）。すなわち英語では、リデュース、リユース、リサイクルの 3R、1L はリース（lease）です。共有（リース）まで活用して、生産流通、消費、廃棄の全過程で資源効率を上げ、廃棄物の極小化が現代の生産原理でありますということなのです。

どんな教科書でも、廃棄物を出しても問題はないなど書いてある本はよほど大昔。われわれが学生のときには、廃棄物のことは書いてありませんでした。生産効率を上げることこそが大切であると厳しく指摘されていました。それから、エネルギー効率を上げたほうがいいぐらいでošまいでした。しかし、廃棄物すべてまで含めて考えるというのが 21 世紀の基本的な生産原理なのです。アダム・スミスの本にはそんなことは書いてありません。ですから、アダム・スミスの考え方でいまだにさまざまな計算が成り立っているのが気になっています。この点で会計学者は頑張りということになります。

廃棄物が長く存続してはならない。生命の尊厳に抵触してはならないということが現代の生産原理です。経営哲学とは何だということになると、社会性の原理と生産の原理、両方充足しなければだめだということになります。原理とは何かというと、この前のところで、公平性だけでもだめ、合法性だけでもだめであり、さらにもう一つ現代では、生産の原理です。こういう諸原理が充足されていなければなりません。ただ効率がいいから、これではだめなのです。人が死んでいいはずないではないかということになります。

（シート 14）では、次に責任を考える。経営のほうはわかったけれども、責任はどういうことかということを考えてみます。責任は 19 世紀まで個人に対する負荷、負担の側面が強調されていました。英語ではライアビリティ（liability）といいます。ドイツ語ではシュルト（Schuld）が随分強く意識されたということです。

20 世紀に入り、個人や社会の行為の結果に対する対応・応答が求められるようになって、そのために、レスポンス（response）・プラス・アビリティ（ability）すなわち responsibility = 責任が一般的になってきました。ただし、社会的対応は不可欠だが、社会的公正のバランスが欠如し始めている。対応ばかりやって、人が死んでも補償金さえ支払っておけばおしまいだ考えるようになっています。何か釈然としない思いがありますが、ここにはやはり社会的公正のバランスが欠如していて何となく落ちつかないのです。「いや補償金を払ったのだし、裁判は一応終わっ

たのだからもうこれでいいではないか」というように思われます。そうかもしれないが……、「あの人たちは『のうのうとして』暮らしているではないか。家は全然とられていないし、豊かな生活をしている。これはどういうことなのだ」という思いが出てきます。こちらのほうが病気になっていたり、家族が死んでいるけれども、いったいどういうことなのだと心の底で強く思います。これはどこに問題があるか考えてみると、社会的バランスがここにはないからなのです。

（シート 15）責任の時間と空間です。時間の問題は非常に難しいのです。責任は一般的には現在です。しかし、対応を重視すれば将来です。もちろん原発問題を含めて、将来二度と起こらないためにという根拠で実行します。事故が起きて、原因は何だと怒ってみると、原因というのは将来から起こってくるわけではないのです。過去に原因があるのです。つまり、過去からの組織の意思決定と行為によっているのです。

組織、個人は、過去のいつの時点まで対応するのか。これはきわめて難しいのです。最近、選挙で失敗した人がいましたけれども、それは明らかに、過去の問題は過去の問題だからといって、やはり場合によっては過去を引きずらなければいけない。それではいったい、いつまで引きずるのだということになります。現在、われわれが生きているのは、過去とまったく断絶しているのか。そうではない。これは非常に難しいのですけれども、やはり過去の時点のところまでさかのぼらなければいけないということになります。

（シート 16）次に空間は間違いなく当事者の属する地域、多くの場合、現代では国家が一般的でありますけれども、現代では空間が拡大しており、国際協力、国際協定が増大しています。責任を負うべき空間は拡大して、現代では地球規模を考えないと、まったく不十分なのです。だから、社会的責任というのは地球規模全体になっている。だから、ISO も含めて社会的責任で、全部含めて考えるようになったということになります。

（シート 17）それで、責任の種類については、こういう形で一般的に宗教的責任をはじめいろいろあります。ここでは社会的責任を議論していますね。責任には、責任を問う規範と有責の規範。主体としては、個人と組織、国家がある。責任発生を問う根拠として因果責任、役割責任、無過失責任、これは法律の問題を含めて全部含まれます。経営学においては、経営責任だとか管理責任、これ以外にもいろいろあり、また説明責任もある。それから、対象としては人と物があって、それから、関与は直接、間接があったりするというようなことになります。

（シート 18）責任について考えてみると、もう一つは、組織の意思決定にかかわる人々の責任、組織上の責任、これは非常に難しいのです。なぜかというと、経営学では組織的意思決定の過程を議論して、2001 年に亡くなりましたけれども、ハーバート・サイモンというノーベル経済学賞をもらった方が、明らかに意思決定は企業の一番根幹だということで、意思決定論を構築しました。ハーバート・サイモンによると合成的意思決定とは、いろいろな意思決定が合成されて組織的事実になる。それだけではない。意思決定は、反復的、累積的意思決定過程をつうじて、全体として組織の意思決定となり、行為になる。ここで、最初に戻って考えてみると、文明という

話を途中で出しましたけれども、近代社会はどうやって成り立ったのかということを考えてみると、1200年ぐらいから1700年ぐらいまでかかっているのです。このことは、合成的意思決定過程、すなわちいろいろな人がかかわる。それから、反復的に、累積的に意思決定がなされ徐々に組み立てられて現代の近代文明ができ上がったのです。

ここで、経営哲学を考えると、組織的意思決定とは、ただ組織の問題ではなくて、人間が人間として生きてきて、文明だとか文化をつくり上げていくのですが、結局はそういう累積的、反復的、合成的な決定の集積なのだということにもなります。しかも、途中で影響過程というものがある。権力ではないです。権力でしたら、反抗者をすべて刑務所に入れたらいいのですけれども、こうすれば社会が成り立たない。ということは、影響過程というのはいろいろな議論をしながら、こっちのほうがいい、あっちのほうがいい、いろいろ議論しているうちに、徐々に、こういう意思決定に偏りが出てくるということが基本的にもともと重要な問題だからということになっていきます。

それで、大急ぎですけれども、あとは最後のところです。文明のところで書いておきましたが、原発問題も含めて、また原発だけの問題ではないのです。最初に申し上げましたが、リーマンショック、金融危機も含めて、それから今、株主総会の時期ですが、総会で経営者が高額報酬をもらっている。日本は現在のところ比較的少ないですけれども、この点については、社会的公平から、欧米では経営者の報酬の議論が出ているのです。経営哲学を基盤にすると、社会的公平性の原理と、生産の原理の両方を含めて、これらの問題にまで視野が全部広がってくる。この点では、経営哲学は経営哲学として、経営学とは違った形で、経営学はそこまでなかなかいいのですけれども、哲学だとこういう二つの原理から、両方の問題に光が当たってくるので、こういう問題を設定しました。

ですから、次にお話をいただきますけれども、八巻先生は中世哲学の代表の方。次に中村先生、もちろん英法、米法、会社法の専門家ですけれども、長い間、法学を研究した先生です。岡本浩一先生は非常に立派な先生で、社会心理学を含めて国際的にも活躍されて、人間の行為を含めて総合的に考えていらっしゃる。全体として通底できるのは哲学であろうということで、今回、こういうテーマでお話をするようにいたしましたので、最後までよろしくお願いいたします。

大変失礼いたしました。これで厚東の問題提起は終了です。長い間ご清聴ありがとうございました。

企業の「社会的責任」を考える

早稲田大学産業経営研究所
第21回産研アカデミック・フォーラム
厚東偉介(こうとう・いすけ)

1 はじめに

- 現代は、企業だけでなく、組織や政府、個人まで、「社会的責任」が問われる時代になった
- ISO(国際標準規格)で2010年10月に、「社会的責任」26000が承認されている
- ここでは、「企業」に光をあて、そこから派生して、さまざまな諸領域にまで広げて、「社会的責任」を検討する

1

2 経営哲学から「社会的責任」を考える 経営哲学の基本的な考え方

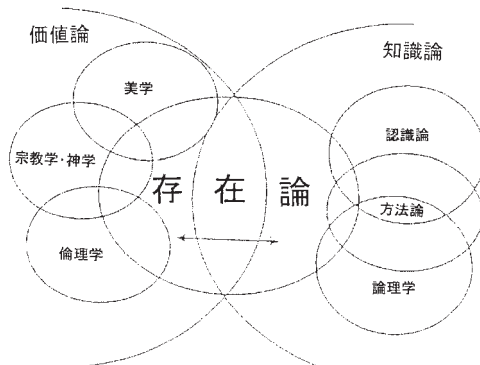
- 「経営哲学」は、「哲学」と「経営学」の双方の領域に関連する研究分野である
- 「哲学」の領域にまで踏み込む「無謀な冒険」が必要だ！……現代社会の問題は諸領域にまたがる重層的な特徴を持つ……現代科学は「分析」、ものごとを厳密に区切り、その中だけで、“精密な分析と結論”を出すことが「科学的態度」であり、研究分野での研究業績になると評価されている……総合的・全体的研究は「必要だ」と指摘されるが……問題を基本的に考え直すには「無謀な冒険」に挑戦すべきだ

2

シート2

経営哲学の基本的な考え方 哲学の諸部門(図1参照)

図1 哲学の諸部門



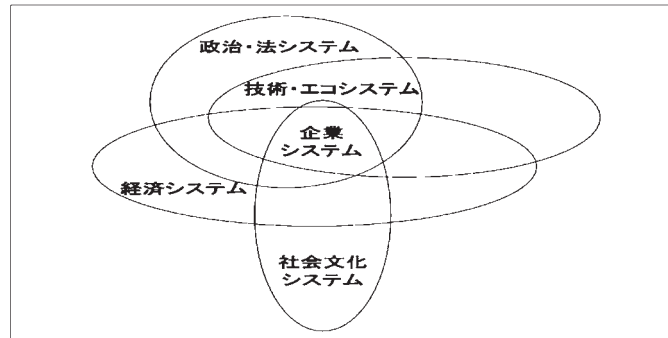
出所：筆者作成

3

シート3

経営哲学の基礎的課題 現代企業の性格・・・多重・重層的 システムとしての現代企業(図2参照)

図 2 多重的システムとしての現代企業

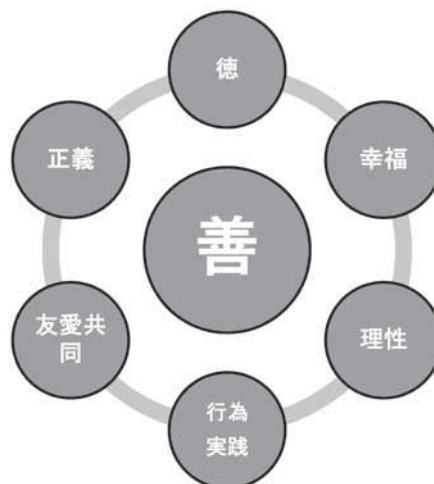


出展資料：厚東偉介「経営のクオリティをもとめて」《経営行動研究年報》第9号
2000年5月 pp.1-6

4

シート4

実践と善(図3)

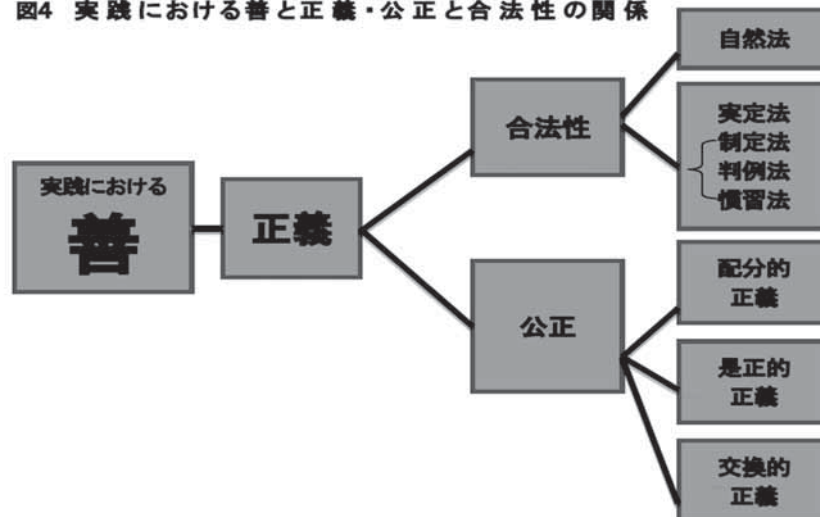


5

シート5

実践の善と正義=公正と合法性

図4 実践における善と正義・公正と合法性の関係



シート6

アリストテレス哲学と文明

- アリストテレスの哲学の意義
- 「自然学」があり、「存在論」の領域がある
- アリストテレスの「哲学」の諸部門
- 「理論・テオリア」・・・真理認識
- 「形而上学・メタフィジカ第一哲学」「自然学
ピュシカ第二哲学」「数学第三哲学」
- 「実践・プラクシス」・・・実践目的
- 「制作・ポイエシス」・・・技術的

7

シート7

経営哲学の領域

- 理論的領域・実践的領域・制作的領域、この全ての領域に関係している
- アリストテレスは『政治学』の初めの部分で「家政術・オイコノミア」oikonomia・・・経済economy について述べている
- 経済システムと技術的システムを、経営哲学の基礎的課題として考えることが導かれる

8

シート 8

経営哲学における文明の意義

- アリストテレスの「実践的・プラクシス」の領域
- 「制作的・ポイエシス技術的」領域を含む領域は「文明」という概念が導かれる
- 「地球環境の生態学的制約条件・地球資源エネルギー、技術体系を含む人間や社会の生活体系全体の在り方」・・・・これを「文明」と呼ぶ・・・・理論・テオリア、実践・プラクシス、制作的・ポイエシス、これらがオイコノミアだ

9

シート 9

経営哲学の意義

- 「文明」の「社会的・技術的」な基礎的な存在条件が扱われるところが「哲学」である……「思想」「理念」「価値観」などとは別の基礎的存在条件までを「哲学」は含む
- 現代の生産活動からもたらされる「結果・帰結」に対して「責任」を考えると、「文明」それ自体のあり方を無視することはできない！
- 「経営」とは「実践」である

10

シート 10

経営実践とプロネーシス・思慮

- 実践は、自発的行為であり、選択には「思慮・プロネーシス」が先行する。「思慮」は人間的な事柄にかかわり、「行為によって達成される目的＝善」をめざす
- 「善」は、善いこと・正しさ（共同体のために）
- 「正義」は共同体にかかわる「徳」……「公共善」
- 人間・組織活動が「科学技術」を用いて「財サービス」の生産をする……「生命の尊厳」を損なってはならない
- 実践活動が「善」……「正義」を充足することが条件だ……合法性と公正の重要性

11

シート 11

経営哲学の正義・・・社会性の原理

- 現代の経営哲学の「社会性の原理」は、「社会的公正の維持」・・・「合法性」と「公正」・・・「配分的正義」「是正的・匡正的正義」「交換的正義」・・・にある
- 全ての組織・個人活動は「社会性の原理」に抵触すべきではない

12

シート 12

経営哲学の生産の原理

- 「生産の原理」は「生命の尊厳」を「最低条件」にして、「省資源・再使用・リサイクル」の3R1Lの原則を充足し、生産流通・消費・廃棄の全過程で「資源効率」を上げ「廃棄物」の極小化が「現代の生産原理」である
- 「廃棄物」が、長く存続してはならない。「生命の尊厳」に抵触してはならない

13

シート 13

責任・・・負荷と対応

- 「責任」は19世紀までは、個人に対する「負荷・負担」の側面・・・英語でLiability、独語でSchuld・・・が強く意識されていた
- 20世紀に入り、社会や個人の行為の結果に対する対応・応答が求められるようになった
- Response+ability が一般的になる
- ただし、社会的対応は不可欠だが、「社会的公正」のバランスが欠如し始めている

14

シート 14

「責任」・・・時間と空間

- 時間の問題は、重要だ。一般には「現在」の時点が中心
- しかし、対応を重視すれば、「将来」「未来」に焦点が集まる
- しかし、「原因」は「過去からの組織の意思決定過程とその行為によっている
- 「組織」「個人」は「過去」のいつの時点まで対応すべきなのかが課題だ・・・「難問」だ！

15

シート 15

「責任」と「空間」

- 空間は当事者の属する地域・国家が一般的
- 現代では、空間が拡大しており、国際協力・国際協定が増大している
- 「責任」を負うべき「空間」は、拡大している
- 現代では、「地球規模」と考えるべきだ

16

シート 16

責任の類別規準

責任の類別基準	責任の類別・類型
責任を問う規範と有責規範	宗教的責任・倫理的・道徳的責任・政治的責任 法的責任・社会的責任・経済的責任・環境責任など
責任を問われる主体	個人責任・組織責任(集団責任・企業責任、その他の組織責任)・国家責任など
発生責任を問う根拠	因果責任(原因責任・結果責任)・役割責任 無過失責任・過失責任など
経営学における責任態様	経営責任・管理責任・監督責任・執行責任 事業責任・説明責任
責任対象	人(対人責任)・もの(対物責任)
発生責任への関与度	直接責任・間接責任

菊池敏夫・平田光弘・厚東 偉介編著『企業の責任・統治・再生』文真堂、2008年より転載

17

シート 17

経営学上の責任

- 「経営責任」「管理責任」「監督責任」「執行責任」「事業責任」「説明責任」
- 「組織の意思決定にかかわる人々の責任」・・・「組織上の責任」・・・「組織的意思決定過程」は「合成的意思決定」「反復的・累積的意思決定過程」
- 「影響過程」

18

シート 18

企業の「社会的責任」を考える

1 はじめに

現代では、企業が大規模化し、その活動が地球全体に広が理、深まり、企業活動が社会に及ぼすその影響は強烈になっている。そのため企業の「社会的責任」の議論が、世界各地でみられる。ISO（国際標準規格）では、2010 年 10 月には「社会的責任」というタイトルの 26000 という規格が承認されている。ISO では、企業だけでなく、政府・大学・研究所・病院・その他多くの非営利組織（NPO）NGO 対しても、同じように現代社会では、その組織活動が、我々の社会生活に強い影響力を及ぼすので、「組織体」全体に対して、さらにまた個人に対しても、その「社会的責任」を求めるようになってきている。……そのため、企業だけでなく、我々研究者や、マスコミまでもをもすべてふくめた「社会的責任」を強く考えることが求められている。ここでは、「企業」に光を当て、そこから派生して、さまざまな諸領域にまで、「社会的責任」を検討したい。

2 経営哲学の観点から『社会的責任』を考える

まず、経営哲学の観点から「社会的責任」を、考えてみたい。一般に考えられる『経営学』とは異なった視座を得ることができるであろう。

2-1 経営哲学の基本的な考え方

経営哲学は、本来の哲学に基礎をおいている。そのため「哲学」の領域にまで分け入り、そこから「経営学」に関連する基礎概念を学び取らなければならない。哲学は、古代ギリシャから西欧社会でスタートしているため、その範囲は限りなく広く深い。確かに「無謀な冒険」であり、これまで「経営哲学」と銘打った研究でもなかなか、哲学の領域に踏み込んでいない。現代社会の諸問題は輻輳しているので、その問題を基本的に考え直すには、この「無謀な冒険」に挑戦しなくてはならない。

2-2 哲学の諸部門

哲学は、基本的には、大きく 3 部門に分けて考えることができる。「知識論」「存在論」「価値論」の 3 部門がそれである。（図 1 参照）

2-3 経営哲学の基礎的課題

2-3-（1）現代企業の性格……多重的システムとしての現代企業

現代企業は、経済システム・社会文化システム・技術エコシステム・政治法システムの多重的・重層的システムとして存在している。（図 2 参照）

2-3-（2）実践と善

経営が実践であることは、紛れもないことだ。経営哲学の基礎、「哲学」で、アリスト

早稲田大学産業経営研究所
第21回アカデミック・フォーラム
企業の「社会的責任」を考える

テレスは、実践に先立ち、人生は「最も善きもの＝最高善」を目指すとしている。「善」を成り立たせるものとして、幸福・徳・理性（欲求に身を任せることは、自発的選択が無く、本来の人生ではない）・友愛共同（人は社会的存在である）・正義・実践など、さまざまなものが上げられる。（図3 参照）（図4 参照）

図1 哲学の諸部門

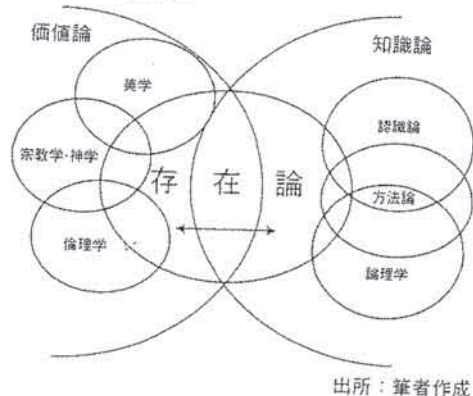


図2 多重的システムとしての現代企業

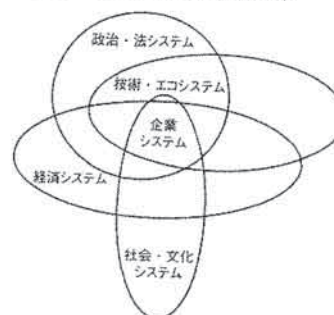


図3 善の構成要素

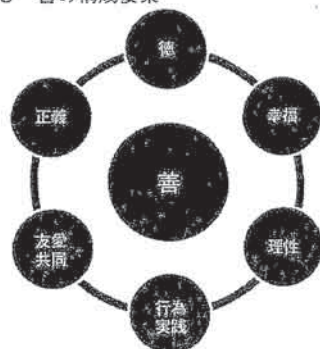
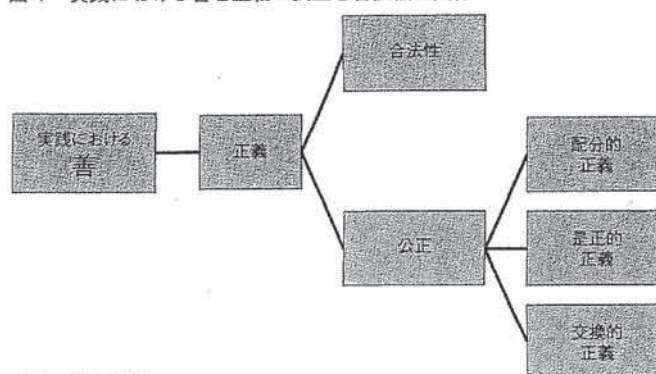


図4 実践における善と正義・公正と合法性の関係



上記の図は、すべて厚東 偉介「経営哲学の未来に向けて」経営哲学学会編『経営哲学の授業』PHP研究所、2012年1月刊、pp. 285－304 より転載した。

アリストテレスの哲学には「自然学」があり、「存在論」が大きな位置を占めていた。アリストテレスは、学問、あるいは広く「哲学」を理論的（真理認識それ自体を目的とする＝テオリアの）領域、実践的（実践を目的にする＝プラクシスの）領域、制作的（制作を目的にする技術的＝ポエシスの）領域の三つを識別している。理論的領域は、自然的存在（運動変化、および静止する自然界の個物を対象とし第二哲学とも呼ばれる）を研究する「自然学＝ピュシカ」の領域、「数学」の領域（第三哲学）、後世では形而上学＝メタフィジカと呼ばれるようになった神学までをもふくむ第一哲学の領域の三つに分化する。アリストテレスはみずから自然学、とりわけ生物学の研究を推し進めた点で有名である。

経営哲学の領域では、理論的領域・実践的領域・制作的領域、この全ての領域に関係している。この点で、アリストテレスの哲学は、経営哲学の基礎としては相応しい。

アリストテレスを援用すると、彼の著書の目的・内容（政治学・倫理学）と、当時のギリシャと現代との離隔を根拠にして「経営哲学」とりわけ現代の企業行動には意味を持たないとの反論があろう。近代西欧語の「経済＝economy」の語源はギリシャ語、オイコノミア oikonomia＝家政術にある。アリストテレスは、「家政術」の中核である財産獲得術についてその著『政治学』の初めの部分で述べている（第1巻第3章）。したがって、アリストテレスの哲学を基礎にして、「経営哲学」を考えると、経済システムと技術エコシステムの双方を、経営哲学の基礎的課題として考えなければならないということが導かれる。

2－3－（3） 経営哲学における文明の意義・・・生産の課題

アリストテレスの時代まで遡り「哲学」を引き出した理由は、哲学が、我々の存在それ自体が自然的・社会的存在であり、人間・社会は、本来こうした全体としての環境の中で生きていることが前提とされ、この前提を基礎に人間・社会が考察されているからである。近代社会に入り、機能分化が進展して、哲学は「認識主体」の人間を中心的な課題にして議論された。

近代哲学、取り分け現代哲学では「文明」が直接取り上げられることは少ない。「人間学」の所与の基礎的条件として扱われている。アリストテレスの「実践的・プラクシス」領域、「制作的・ポイエシス（技術的）」領域の指摘、近代西欧語の「経済＝Economy」の語源の「オイコノミア＝家政術」を考えると、アリストテレスの時代には、「文明」という用語が一般的でなかったが、「地球環境の生態学的制約条件・地球資源・エネルギー、さらに技術体系を含む人間や社会の生活体系全体の在り方」それ自体を、全体として見通すことの必要性が明らかになる。だからこそ、アリストテレスは、理論（テオリア＝真理認識を目的）の領域以外に、実践的（プラクシス）・制作的（ポイエシス）の領域を上げ、これを基礎にオイコノミア、すなわち人間・社会が生産活動という目的のある社会活動を行いつつ、全生活体系が組み立てられていることが十分に理解できるのである。「文明」という社会・技術の基礎的な存在条件が扱われるところが「哲学」であり、「思想」「理念」「価値観」などとは別の領域を確固として含んでいるので、今なお、「哲学」という概念が使われている。

この点で、現代の生産活動からもたらされる結果・帰結に対して「責任」を考える場合には、「文明」それ自体のあり方を無視することはできない。

しかし、現在の科学技術と経済発展の速度が継続すれば、地球環境の保全だけでなく、

早稲田大学産業経営研究所
第 21 回アカデミック・フォーラム
企業の「社会的責任」を考える

資源枯渇に見舞われることは、時間の問題であり、「経済制度」「資本主義制度」「市場経済制度」の在り方だけの議論の枠内では収まらない。12～13世紀の中世ヨーロッパから長い間かけて、反復的・累積的学習選択過程を通じて形成・洗練されてきた「近代の科学・技術を含む生活体系、全体の在り方」＝「近代文明」それ自体が問い直され、本来の意味における「持続可能な文明」に向けて、ささやかでも歩み出さなければならない時を迎えている。「企業や経済」に対する見方も伝統的な枠組みからだけの考察では、「近代文明」の終焉へと導くことになるのである。この限りで【伝統的思考からの脱却】が必要だ。

「経営哲学の観点から」「社会的責任」を考えるなら、経営学の最先端の「生産」のあり方を基礎にして、経営哲学の原理を導き出さなければならない。

2-3-(4) 経営哲学における正義の概念・・・社会性の課題

アリストテレスにしたがって、経営の実践を考えると、自発的行為は選択であり、選択には「思慮＝プロネーシス」が先行するとされる。「思慮」は人間的な事柄にかかわり、行為によって達成される目的＝善を目指すのである。

全ての知識、技術のうちで至高目的は最高善である。善とは正しさであり、正しさは共同体のためになることを意味する。正義は、共同体にかかわる「徳」である。人間は共同体に属しているので、公共善を目指すのである。

現代社会における組織活動は、我々の社会に対する「善」が、基本的な実践目的であるとされるのである。『善』は、まさにそれ自体「善いこと」であり、定義は難しい。しかし、企業を含め、組織の諸活動が「科学・技術」を用いて「財サービス」の生産活動を行った時に、人間の生命の尊厳・生命を損なってはならないという「最低限の基準」は、導くことが容易に可能であろう。

もう一つの「善」は、実践活動が、「正義」を充足することである。「合法性」だけではない。「公正」・・・配分的・是正的（あるいは匡正的）正義・交換的正義が、あまりにも、そのバランスを欠くと、そのバランスの回復を求めて、社会的な運動が繰り広げられる。活動の成果の配分においても、交換が、たとえ「市場」を通じて実施されているので、「それなりの対価」が支払われているにせよ、それがあまりにもそのバランスを失していれば、やはり「社会的運動」が・・・その呼び方は様々であるが・・・繰り広げられることになる。ある社会の中で、一部の人がびとが快適であっても、多くの人がびと、あるいはその他の人がびとが、あまりにも不公正な扱いを迫られ、強いられていると強く感じ始めると、その社会では、その「不公正」な扱いを「是正、あるいは匡正」する強く激しい社会運動が起きる。「社会的公正」のバランスを求める動きは、現代では「民主主義」という政治・法制度によってコントロールされているが、「民主主義」の政治・法制度が、その「社会的公正」に、そのバランスを失したままにされ続けるなら、やはり「社会的運動」が起き、そのための「是正・匡正」が執行されることになる。「民主主義」が「形骸化」して「機能」しなければ、「社会的運動」によって「是正・匡正」されても、仕方ないであろう。

この限りで、経営哲学では、「正義」が重視されなければならないのである。

3 経営哲学における生産の原理と社会性の原理

現代経営学の実業原理は、生産の企画計画の段階から、その生産過程だけでなく、消費、廃棄までもをもすべてを包摂し、「省資源・再使用・リサイクル・リース」の「3R1L」を原則としていなければならない。この点は、現代のいかなる『経営学』の教科書にも掲載されている。したがって、「大量生産・大量消費・大量廃棄」の生産から、「省資源・リサイクル可能」で、廃棄物が少なければ、少ないほど、「優れた」「生産システム」として考えられている。

したがって、現代の経営哲学の「生産原理」は、生命の尊厳を「最低条件として」「省資源・再使用・リサイクル」の「3R1L」の原則を充足し、さらに生産・消費・廃棄の全過程における「廃棄物」の極小化こそが、『現代の実業原理』であるといえることができる。

全ての組織活動は、「生産原則」を遵守し、これに抵触してはならないのである。

現代組織の諸活動では、「実践にかかわる善」として、「正義」が重視されなければならない。「正義」は、「合法性」……すなわち「法的秩序」を遵守することは大切である。しかし、「法律を如何に遵守」していても、社会的公正のバランスが、著しく欠けていけば、「民主主義」の「政治法システム」が「正常に機能」していれば、新たに立法措置が講ぜられる。「法律の根幹は、社会的公正」にあるからだ。

したがって、現代の経営哲学の「社会性の原理」は、「社会的公正」の維持……「合法性」と「配分的正義」「是正・匡正的正義」「交換的正義」の全ての正義の維持にある。現代社会において、すべての組織活動は、「社会性の原理」を遵守し、これに抵触してはならないのである。

現代社会において、組織のあらゆる諸活動は、「生産原理」と「社会性の原理」の2つの原理が充足されていなければならない。これに抵触する組織活動は、社会から排除されるであろう。また、排除されても然るべきであろう。

4 「責任」……「負荷と対応（応答）」「時間と空間」、さまざまな「責任」

4-1 「責任」……「負荷」と「対応（応答）」

「責任」は、19世紀まで、主に個人に対する負荷・負担を課するという側面が強調され、この側面で理解されていた。英語では、liability, ドイツ語では、Schuld, という用語で言い表されている側面としての「負荷」の側面である。

20世紀に入り、社会活動が複雑化するだけでなく、行為がもたらす社会や個人に対する結果に対する対応・応答が強く求められるようになった。対応が素早く、十分になされれば、補償だけでなく、同種の結果に対する「予防措置」も講ぜられることになり、社会や個人に対するリスクを軽減させることになるからである。例えば、交通事故が起きた場合、被害者には迅速で十分な補償を、道路や自動車、運転者などには、「交通事故」を起こさないようにするためのさまざまな措置を迅速に、十分にとることが、「交通事故」の減少、最終的には無に近い状態へと近づけることが可能になるからである。「負荷」をかけるより

早稲田大学産業経営研究所
第 21 回アカデミック・フォーラム
企業の「社会的責任」を考える

は、「対応・応答」をさせた方が、社会的に、より望ましい結果がもたらされる可能性が高くなると考えられたからである。そのため、責任は、「responsibility」(対応可能性)「response + ability」という用語が、英米語でも、ドイツ語でも、次第に使われるようになってきたのであった。現代では、「責任」という言葉は「responsibility」という用語が一般的に使われるようになってきている。

社会的には、「対応・応答」を迅速かつ十分にすることは、極めて重要で、望ましい。しかし、「負荷」の側面は、「刑法」の領域にだけ限定され、「負荷としての責任」はもっぱら、『刑法』の領域だけに限定されることになり、「その補償」も、組織から支払われたり、場合によっては「保険」などで「支払われ」たりすると、事故や事件に対する「対応・応答」は、確かに「社会的になされた」ことになり、一見、問題は無いように見える。

しかし、組織が、その補償金を支払い、組織内の個人を辞職させたりすることで、「責任」を取ったことにした場合、何か「釈然としない」思いが湧き上がってくる。この「釈然としない思い」は、「社会的公正」のバランスが「組織」の職務・職位の辞任・辞職だけでは、何か、どこかで欠けているように感じるからである。

20世紀に入り、「科学」取り分け、「社会科学」が、「自然科学」を範型にした「実証主義」を中心にして展開されるべきだとされる主張が強まり、社会科学の「責任」は、「対応」、「社会的対応」へと向かい、負荷としての側面や「社会的公正」は、それ自体を実証することが、現代までの「科学的手続き・検証手続き」では、難しいので、「負荷」はもっぱら「刑法」に依拠させ、「社会的対応・応答」が「社会的責任」として議論されるようになってきている。しかし、組織の当事者は、組織からの補償金とせいぜいのところ「辞任」で済まされ、他方、「命まで落としたり」「生涯の身体的損傷」を受けていても、それに対する「補償」は、すべて裁判その他で済まされ「是正・匡正」されたとしても、「命を落としたり」「生涯の身体的損傷」を受けた当事者からすれば、自分たちは生涯の苦しみの中で生活して、他方「障害」を与えた人々は、何らの負荷を直接負っていない（心理的には負っていると主張されるであろうが）という「社会的公正」のバランスが、「是正・匡正」されているとは、到底思われない。「近代社会における責任」、さらには「組織行為における社会的責任」とは、本来こうしたものだ、と『割り切れ』『納得せよ』と言われても、やはりどこかで、「社会的公正」への「是正・匡正」のバランスが、回復されるべきだとする考えが、社会的に底流とし存在していることは確かである。

こうした思い・思考は、「心理的な問題であり」、「社会的是正・匡正」措置は講ぜられているとして、社会的には問題外にされることが多い。また、当事者に「負荷」を与えない方が、むしろ「真実」を語るので、「裁判」その他は、「事実解明」より「隠蔽」に偏らせるとの社会心理学の研究成果もある。しかし近年、「加害者」の人権の方が重視され、加害者の社会的教育への対応へとその比重を移して来たが、被害者は、賠償その他だけで、「置き去りにされてきた」という意見も強まり、加害者と被害者の「社会的公正」のバランスが、再び議論されている。単なる「心理的問題」だけではないことは確かである。司法過程での「真実解明」「事実解明」の促進のための制度改革も必要である。

4-2 「責任」……「時間と空間」

「時間」の問題は、「責任」をいつの時点から、いつの時点まで「負う」のかという課題である。一般的に「責任」は、その時点の「当事者」が負うべきと考えられる。『現在』時点を中心にして、考えられる。しかし、「対応」を重視すればするほど、「将来」「未来」に向けて対応することに意味があるとされる。人間の生命を終焉させ、「障害の身体的損傷」を与えても、回復不可能であるので、それに対しては、「賠償」「補償」で「是正・匡正」したことにして、その対応の根本的な意味は「未来」に向けて、二度とこのようなことを引き起こさないという、そのための「対応」に意味があると理解されている。

しかし、原発の事故などは、「未来」に対しての「対応」が必要であるが、原発事故の原因は、「過去」からの「組織的意思決定過程とその行為」に拠っているのも確かである。「地震」その他の事由で人間の生命の損傷を与えると、確かに「震災」の起きた時点での当事者が、その対応・責任を負うのであるが、震災以前にかかわった人々の対応・責任は、一切問わなくて良いのであろうかという難問も提起される……この問題は、現代でも無視できない……「組織」は、いったい、「過去のいかなる時点」まで「対応」すべきなのかということが、問題になっていることも確かである。確かに『難問』であるが、無視することはできない課題である。「未来」に対する「対応」以上に複雑で難しい。

「空間」は、双方の当事者の属する地域・国家を考えることが一般的である。しかし、現代では他国にも大きな影響が及ぶので、そのための国際協力・国際協定が、急速に増大している。「責任」を追うべき「空間」は、拡大しており、現代では「地球規模」と考える必要がある。

4-3 経営学の「経営責任」「管理責任」「監督責任」「執行責任」「事業責任」「説明責任」「組織的意思決定にかかわる人々の責任」……「組織的意思決定過程」は「合成的意思決定過程」「反復的・累積的意思決定過程」「影響過程」

責任の類別基準	責任の類別・類型
責任を問う規範と 有責規範	宗教的責任 倫理的・道徳的責任 政治的責任 法的責任 社会的責任 経済的責任 環境責任など
責任を問われる主体	個人責任 組織責任（集団責任・企業責任、 その他の組織責任） 国家責任など
発生責任を問う 根拠	因果責任（原因責任・結果責任） 役割責任 無過失責任・過失責任など
経営学における 責任態様	経営責任・管理責任・監督責任・執行責任 事業責任・説明責任
責任対象	人（対人責任） もの（対物責任）
発生責任への関与度	直接責任 間接責任

菊池敏夫・平田光弘・厚東偉介編著『企業の責任・統治・再生』文真堂、2008 年より転載

「監督責任」に対する「執行責任」と「報告責任・アカウンタビリティ/accountability」この点は難しい。執行担当者が自らの行為の説明を、たとえ「負荷」を一切与えないと言っても、おおよそ人は自らに不利益になるような「マイナス情報」を開示し説明することはないからだ。「説明責任」の「客観性」の確保は難しい。

5 金融危機と原発問題

2008年秋のアメリカ発の「金融危機」は、「社会的原理」に抵触している点で、問題である。

2011年3月11日の「東日本大震災」にかかわる『原発問題』は「過酷事故」が起きたので、確かに大きな問題になったが、その廃棄物処理・・・汚染水や廃炉などの「通常の」原発稼働の状態であっても、その廃棄物の危険性が高い。この点で、「生産原理」に抵触しているだけでなく、経営者・原発学者・マスコミ・原価計算の諸制度など様々な点で、「社会的公正」に抵触している。

金融危機においても、原発問題においても、「株主責任」は問われていない。「有限責任」という「合法性」で守られているが、「税金」での処理は、社会的公正の観点から不公正である。「モノだけを言い、有限責任」では、明らかに「社会的不公正」である。

株式会社のその起源が、地中海貿易にあり、主に「船舶」を手段にして、「冒険航海」を企画し、いったん出帆すれば、「船長」の責任がすべてであり、「冒険航海」から寄港すれば、その利益はすべて配分されて、いったん会社は解散されるという状況では、確かに「有限責任」であったことは確かである。船が沈没すれば、その理由が、嵐や海賊によるにしても、その時点で、すべて終了したと考えられたからであった。

現代の株式会社は、「冒険航海」ではない。「継続企業」としての存続を前提として、経営されているのである。

また「冒険航海」の時と、会社の社会的影響力は、比較できないほど広く、強い。